トバイアス・スモレットの「ハンフリー・クリンカー」に於ける人物配合

福井秀加

序

清教徒革命、名誉革命がおさまって議会中心の君主国となった十八世紀の英国は国外では植民地争奪のいくさに忙しかったが国内では市民生活の繁栄と安定期を楽しむ時代が続いた。社交技術を洗練する趣味を持つことも最早、上流貴族階級のみの特権ではなくなりそれは一般市民の個人生活を充実させる為の手段とも目標ともなって来ていた。人々は会話や手紙のやりとりを工夫し、訪問や招待を楽しんで時を過したようである。[1] 十八世紀のイギリス人は夥しい数にのぼる手紙を書いたという。模範的手紙の例文などという本は当時沢山出回っていたものらしい。[2]

この時流にあってサミュエル・リチャードソン〈Samuel Richardson〉(1689—1761) は「パミラ」〈Pamela〉(一七四〇) を発表し、書簡体で書き上げた小説という新しいジャンルを確立させた。リチャードソンと共に十八世紀の四大小説家（リチャードソン・フィールディング・スモレット・スターン）の一人に数えられるスモレット〈Tobias Smollett〉(1721—71) も、初期のピカレスク風作品〈The Adventures of Peregrine Pickle〉(一七五一) や、〈The Adventures of Roderic Random〉(一七四八) はさておき、彼の晩年最后の作、〈The Expedition of Humphry Clinker〉(一七七一) を摂り上げる時は、リチャードソンによって作り出された書簡体小説の伝統に、更に変化のある技巧を加えて、この種の小説の醍醐味を我々に味あわせてくれた人として記憶する事が出来る。

リチャードソンの「パミラ」では手紙の語り手は貞淑な召使いのパミラ一人が主であって、この小説は彼女と、彼女を手に入れようと工夫する若い主人とを事件の主軸に配置して、主人公二人とその周囲の人々の人間関係の心理の面白さを繊細な女性の書簡で書き現わしたものであるが、スモレットの「ハンフリー・クリンカー」は同じ書簡体小説の形式をふみながら、語り手は単数ではなくて、老人組と青年組に分かれる複

数の人物になっている。この書簡の語り手の人物配合の妙味は、作中人物の人間関係を多角的な面からうつし上げて、一つの状況をとり上げるにも、あたかも万華鏡をのぞき込んでいる様な色まばゆい変化を以て読者をひきつけるのである。この人物配合による小説の面白さが具体的にどの様な方法を取ってその効果を現わしているのか、以下「ハンフリー・クリンカー」を繙き乍ら調べてゆき度いと思う。

一、老年と若年の対比

この小説は老年組に属する主人公役のマシュー・ブラムブル氏〈Matthew Bramble〉と妹のタビサ〈Tabitha〉、青年組に属するブラムブルの甥、ジェリー・メルフォード〈Jerry Melford〉とその妹のリディア〈Lydia〉、それにタビサの小間使いのウィニフレッド〈Winifred〉が、かわるがわる各々の友人に手紙を書き送る趣向を取っている。一行は馬車に乗って（ジェリーは乗馬で）イギリス、スコットランドを保養の旅で巡り、道中の見聞をしたためる。旅のエピソードはつきない。それには一行の面々が大なり小なりの関係を結ぶ種々雑多な人間が絡み込んで来て、我々は目のあたりに十八世紀のイギリスの動く社会を見る思いがする。そしてその中に生きる人々の織りなす華やかにして哀しく、滑稽な人生模様を賞翫するのだ。

老人組の手紙の色調は保守的である。ブラムブル氏は目前の情況に判断を下す際、老人の通性として彼の生きて来た過去の歳月の経験を基準にするのでついつい新しいものへは批難、慨嘆の姿勢を見せる。古きものに交替して新らしい社会の担い手が現われる有様を目撃する時は、おとろえゆく姿の必然を直視する以前に新参ものへの批難が口をついて出て来る。彼の口調はしぶい。それに反しジェリーとリディア、これに召使いのウィニフレッドも加えて、この連中にとっては旅は知識と経験を積む機会、見るもの聞くもの目新らしい。保守的な偏見なく見た侭を素直に受け入れる若さに溢れていて彼等の口調には保守色の老人の詰屈さに対比される若さの柔軟性がある。慨嘆の苦味を消す、未熟で危っかしくはあるが微笑ましい甘さが彼等の文面を覆っている。そしてジェリーは知性的なオックスフォードの若者らしい見識を以て常に中庸ある見解を披露する。スモレットはこの絶妙な人物の配合によるコントラストを駆使して、旅行記を旅行記と言い切ってしまえぬ、魅力ある複雑な綾織りに仕上げたのである。先づ一行が旅の最初の目的地、保養地のバース〈Bath〉に逗留した折の模様から老年と若年組の対照を求めよう。ブラムブル氏にとってバースは礼儀も嗜もない身分の低い新興成金共が押寄せている苦々しい盛場なのだ。

Such is the composition of what is called the fashionable company at Bath; Where a very inconsiderable proportion of genteel people are lost in a mob of impudent plebeians, who have neither understanding nor judgment, nor the least idea of propriety and decorum; and seem to enjoy nothing so much as an opportunity of insulting their betters.③

町のただずまいも三十年前の昔と随分変った、ここでは失望するだけだ、とブラムブルは親友で主治医のルイス博士に書く。町の建物が良くなったと言うが円形広場④なんてのは見せかけに作ったものだ、円周上に建っている家々の軒縁のきざな飾りは子供だましのお門違いも良い所、家の構造は不便という他ないし建築物はもろい石造りで粗略に建ててあるからコップ一杯の風で夜もおちおち安心して眠れぬ。方形広場に通じる道はちゃちで汚ない、危くてその上真直ではない。身体の不自由な病人の手押車は馬車を駈る馬のひづめの間を縫って、倒されぬものかとひやひやし乍ら湯治場へ出かけねばならぬ。礼儀も作法も分別もないずうずうしい小商人の妻子達等も金さえあると、バースへ来て貴族や郷士や弁護士達と交わる事が出来るものだから誰も彼もバースへやって来る、嗚呼！……

ブラムブルが、りゅうまちと痛風に肉体的、精神的に痛めつけられてぎくしゃくとした老人の身を華やかで騒々しい社交場と化したバースの町の雰囲気になじめ兼ねている有様は、浴場に近いコーヒーハウスで昼間、為す事もなくたむろして時間を潰している一群の老病人達の描写から窺い知る事が出来る。彼も間違いなくその群の一人なのだ。

We consisted of thirteen individuals; seven lamed by the gout, rheumatism, or palsy; three maimed by accident; and the rest either deaf or blind. One hobbled, another hopped, a third dragged his legs after him like a wounded snake, a fourth straddled betwixt a pair of long crutches, like the mummy of a felon hanging in chains; a fifth was bent into a horizontal position, like a mounted telescope, shoved in by a couple of chairmen; and a sixth was the bust of a man, set upright in a wheel machine, which the waiter moved from place to place.⑤

ブラムブル氏はこの中に変り果てた数人の旧友の姿を認める。感激の再会の場面も失張り老人であるからスムーズには運ばぬ。若き日の海軍の友バルダリック〈Balderick〉はブラムブルの名前を聞くや「ああ、マット、俺の僚艦！ まだ浮かんでいるのだね」と立ち上り彼を抱擁する。が、バルダリックの木の義足はその拍子にいやという程ブラムブルの痛風の足を踏みつけ、彼の眼鏡のばねはブラムブルの眼玉に飛び込ん

だ。彼は悲しくて涙を流す。ブラムブルが肉体的苦痛に悩まされている時、彼は怒りっぽい老人で見るもの触れるものに一応の不平を漏らさねば気が済まぬ。バースの温泉は不潔で考えてもぞっとすると彼は言う。湯の中には病人が落してゆく、るいれきや疱瘡や壊血病や癌腫の病菌がうようよ浮かんでいるに違いないし、逗留客が鉱泉水を飲む場所になっている大社交広間と貯水槽の構造関係を考察してみるに、広間に導入されている鉱水を飲む患者は温泉で病人が落とした垢を飲んでいないとも限らぬ……とか、彼は当たり散らすのである。

ブラムブルの妹四十五才の老嬢タビサは、旅の見聞を一言だにしるさない。目新らしいものに目をみはるという精神の若さ、好奇心は彼女から消えて了っているのか、旅には興味も関心もない様子で彼女は専ら心をあとに残し、留守にして来たブラムブルトン屋敷の管理の用件をせっせと女中頭のグウィリム夫人〈Mrs. Gwyllim〉に書き送る。老人臭いのである。然し皮肉にもこの実利主義一点張りの彼女には大いにロマンティックである筈の旅の目的、husband-hunting があった。その目的のために道中彼女は涙ぐましい攻撃精神をもって活躍する。だがそれはこれ迄家政を上手くさばいて来た、タビサおばさんの家政設計を更に有利に転回する計画の一部であるように見える。彼女は掛け引きに余念がないけれども老醜の哀れさを感じさせる痛ましい雰囲気など御持ち合せでない、年老いても夢を捨てずに配偶者を求めて旅をする等というロマンティックな目標を持っている筈の彼女はどうして仲々の現実主義的合理精神の持主である。その反対に理屈をこねて、うわべは合理主義者に見えるブラムブルは心の底にロマンティックな夢を抱いている。長旅の途上、偶々尋ねた友人ベイナード〈Baynard〉の所で、その友が夫人の虚栄心を満足させるように務めたために倒産の憂き目に逢っているのを知るや、てきぱきと彼の負債を処理し、所有の土地を遊ばせて置かぬよう工夫し、不要の贅沢品を整理するなど異常な熱心さで友人の手助けをする。その事実だけを摂り上げると、彼は理性で物事を判断処置する合理精神に徹した人間の様に見えるが、実はこの様に熱心に友人を援助するのも、彼自身長年憧がれている理想的な静かな田舎の生活を彼の友人に於て具現したいというロマンティックな衝動が大いに動いているからに他ならない。

ロマンティックであって良い筈のタビサが甚だ現実的で、合理主義のように見え乍ら実は夢を抱くブラムブル、この老兄妹二人の異なる性格の面白いコントラストもスモレットの心憎い人物配合の技巧と言えよう。

老年に対して若者のジェリーはブラムブルの苦々しく思う所をさらりと受け止めている……。バースは小さい町乍らいろいろの楽しみがあると彼はオックスフォード・ジーザスカレッジの寮友フィリップス〈Sir Watkin Phillips, Bart.〉への手紙に綴る、第一、多種多様の人間に出逢

う。

Here, for example, a man has daily opportunities of seeing the most remarkable characters of the community. He sees them in their natural attitudes and true colours ; descended from their pedestals, and divested of their formal draperies, undisguised by art and affectation. Here we have ministers of state, judges, generals, bishops, projectors, philosophers, wits, poets, players, *chemists*,⑥ *fiddlers*, and *baffoons*. If he makes any considerable stay in the place, he is sure of meeting with some particular friend, whom he did not expect to see ; and to me there is nothing more agreeable than such casual rencounters.⑦

ジェリーはブラムブルの嫌う所をかえって良しとする。

Another entertainment, peculiar to Bath, arises from the general mixture of all degrees assembled in our public rooms, without distinction of rank or fortune. This is what my uncle reprobates, as a monstrous jumble of heterogeneous principles ; a vile mob of noise and impertinence, without decency or subordination. But this chaos is to me a source of infinite amusement.⑧

市民階級の群が貴族や上流社会のサークルにどんどん入り混って来るのは従来の社会秩序を乱すというより社会全体が進歩向上する徴候であろうというジェリーは、秩序と服従を何よりの美徳と考えるブラムブルの貴族的社会擁護の立場に対して民主的社会擁護の立場をとるようだがこの対立する考え方も老人と青年という配合を考えると我々は抵抗なく彼等の言葉を身近に感じ、二人の対照を印象深く受け入れるのである。

リディアにとってバースは「地上の天国」とも映る。華やかで楽しく、美しい。ブラムブルには吐気をもよおさす程不潔な鉱泉の水もリディアは効き目のある鉱水だと思う。

…… it is rather agreeable to the taste, grateful to the stomach, and reviving to the spirits.⑨

この新らしい世界には週に二回舞踏会があるし音楽会は一日おき、それに個人的なお茶の会もある。

The eye is continually entertained with the splendour of dress and eqiupage ; and the ear with the sound of coaches, chaises, chairs, and other carriages. *The merry bells ring round*, from morning till night.⑩

ブラムブルの手紙から我々は痛風やリュウマチスに苦しんでいる人々の用いる手押車の軋る音、松葉杖のきこえない音と、それには無頓着に

押し流れて行く大衆の息詰まる社交場のうつとうしい低俗な雰囲気に満ちたバースの町を心に描くが、リディアはこれと対照的に甘美で魅力的な、着飾った人々の絹づれの音と共に流れゆく洗練された社交場の町バースを映し出してくれる。これはどちらの手紙も正しい。一つは老人の眼に映るバースであり、他方は若者の眼に映るものである。この老年と若年の対比から描き出される保養地バースは一幅の絵画としてではなく生き生きとした姿で我々に迫って来る。

二、立体的ビジョン

この旅行記は動いて行く。一行を乗せた馬車が町から町へと移動するにつれて新らしい展望が読者の目前に開けてくるが、それは一人の人間が書き上げた一つの纏った印象ではなく、分別臭い眼鏡を通し、若い眼を通し、教養の異なるレベルの眼を通して、ちぐはぐな観察がいろいろと飛び込んで来る、其処が面白いのである。この異なる報告は我々を不安にする。そして我々は好奇心を駆り立てられる。何となれば読者は作品と一定の距離をおいて客観的に統一のある映像を把え難くなって来る、読者は安心して画面の展開を眺めていられない。出来得れば自分の眼でもう一つの観察をして真偽を確かめてみたくなる程作品の中に引き込まれて了う。その一例をブラムブルとリディアの手紙から挙げよう。ブラムブルは言う。

……ロンドンは開けゆく都会である、(この時我々は一七七〇年の頃を思い浮かべねばならぬ)新らしい家がどんどん建ち並び新らしい道路は道巾も広い、車の交通が出来るブラック・フライヤースの橋[11]などは公共心と民衆の嗜好を示す高貴なる記念建造物ではあるが――だがこの都は育ち過ぎの化け物の様相を呈している。都会の贅沢に煮きつけられる田舎者は土地を捨てて出かけて来る、故郷は畢竟人手不足、都会では立身出世の夢に失望した者が自堕落に身を持ち崩し街道の追剥やペテン師となる。(火事と泥棒は当時ロンドンの名物であった。ジャック・シェパードやジョナサン・ワイルド等石川五衛門の如き有名な盗賊が活躍していた。)貴賤の区別も従属関係も失くなって、頭がどうかしたんじゃないかと思われる位、休みもせず稲妻のように人々は駈けずり廻り、供廻りを引具した馬車はフルスピードで街を走り、彼等の足元で舗道が揺れている。ロンドンの上流階級の娯楽場として名高いラネラ〈Ranelagh〉にしたって群衆はよく聞えない音楽を聞き乍ら人のあとをついてめくらのろばの様に円形広間をくるくるまわりめぐっているだけだし、ヴォホール〈Vauxhall〉にした所で安ぴか物の子供騙しだ。俗悪趣味の俗物の

目を惑わし彼等の想像力を紛らすように謀ってある、⑫……と言われると、我々は成程と、そのロンドンの有様を脳裡にえがくのだがこの納得したイメージは早速次のリディアの手紙で修正を加えられる。彼女は言う。……ロンドンは驚異の町、セント・ポール寺院はこの世でこれ以上に立派で壮厳なものがあろうかと思われる位、テームズ河は世界の船をひき寄せているようでアラビアン・ナイトやペルシャ物語の豪華な財宝が此処に集まっている⑬（実際英国は海外貿易に大きく雄飛していた頃である）。ラネラは魔法の宮殿、ヴォホールはパピリオンや神殿や洞窟や丸屋根のある建物や、滝や茂みや芝生で飾られた広大な庭園である……と。二人の手紙を並べてみるとこれは再び老年と青年の観察の価値観の差、視点の差でもあるが、ロンドンは陽光のもとで生き生きと若々しく輝いている姿と、その裏に隠れている醜悪な部分を表から裏から立体的に我々に覗かせてくれるのである。

小間使いのウィニフレッドは自分の狭い視野で捕えた彼女に興味のある事しか話さないからつまらぬ話が手紙の画面一杯にいきなり拡がって来る。ロンドンからの手紙ではロンドン塔の呼物になっているおっかないライオン……彼は近寄ると、処女でない者には呻り声を上げて爪をかけるという……その話や、サドラー〈Sadler's wells〉の温泉の魔術使の如き二輪車の綱渡りや、宙返りを見たこと、其処で男にちょっかいをかけられたこと、新らしいフランス風の髪型に結って鳥屋の美人のお嬢さんと、薄暗がりで見間違われたこと等が話題に上る⑭。尤もらしい町の全景が描き出されるより取るに足らぬつまらぬ事件が思いがけなく大写しに現われると旅行記はとっぴょうしもない新鮮な印象となって我々に喰い込んでくる。旅行記の中の連中と一緒になって旅をしている様な気分を惹き起すこの効果をスモレットはウイニフレッドを使って作り上げている。

複数の人物の配合によって組み立てられて映し出される立体的ヴイジョンは景色の描出だけではない、旅のつれづれに起こる事件を物語る際にも適用される。スモレットに於いて事件の立体的な描写は同時に登場人物の性格描写に密接に結び付いているのだ。

スコットランドを巡っての帰途、馬車道中にてんやわんやの一騒動がある。雨で増水しているとある河を渡る時、引き具装置がはずれて馬車は強い水流のただ中に転覆した。タビサの結婚計画網にひっかかりかけている、スコットランドの奇人リスマーゴ〈Lismahgo〉は勿論タビサを、ジエリーはリディアを、旅の途中ブラムブルが馬丁に雇い入れたクリンカー〈Humphry Clinker〉はウィニフレッドを助け出す、その間転覆の折一番下敷きになったブラムブルは水の中で気を失っている。髪を乱した人魚の様になったウィニフレッドを引張り上げていたクリンカ

ーはブラムブルが見えぬと知るや、彼女を水中に放り出して稲妻の如く水中にもぐり、号泣し乍ら溺死体のようになったブラムブルをかかえ出す、この話の顚末はフィリップス宛のジェリーの十月十四日の手紙で読者は知っているが、リディアが又グロースター寄宿学校の親友レティシャ・ウィリス〈Miss Laetitia Willis〉宛の手紙十月十四日付で、……恐ろしい事だった。私はお父さんとも、一番のお友達とも保護者とも思う人を失う所だった。と言うのを聞くと新たに水災事件を思い出すし、ウィニフレッドが同じく十四日付朋輩のマリー・ジョーンズ〈Mary Jones〉に宛てて、ぬれ鼠の様になって河からひっぱり上げられたこと、その時真新らしいナイトキャップと靴を片足失くして、又水の中に放り出されたから、粉屋さんが乾いたおかにかかえて来て呉れなかったら私は水っぽいお墓に行ってたことでしょうよ……等と言うのを聞くと更に騒動の印象は強くなる。数人に繰返して事件を語らせそれを印象づけ全貌を明らかにしながら、同時に事件に於て活躍する人物の性格描写を肉附けしてゆくのである。気難かし屋で文句ばかり言うブラムブルがリディアを始めジェリー、ハンフリーから、こんなにも敬愛されている優しさを持った人間だったのかという事をブラムブルが溺死寸前になった時の皆の反応から我々は再認識する。又この水災事件がきっかけとなって、題名上の主人公ハンフリー・クリンカーの身許が実は若き日のブラムブルの罪を背負った隠し子であったと判明するので、盛り上りへの前奏になるこの場面は強い印象を与えるように仕組んである。多角的な事件の描写と性格描写の肉附けと、その事件から解き明かされて来る謎の決着にスモレットの使う人物配合の巧みさが此処にも亦見られるであろう。

三、克明な肖像

数人の語り手がお互いの話を補い合う形になって物語に厚みを持たせてゆくのがこの書簡体小説の構成である。そして語り手の人物配合の巧みさは、作中に登場する人々のポートレートを効果的に描き出す役を果している。ブラムブルの性格は彼自身が親友のルイス博士に宛てる手紙の中から推察されるだけでなく別人の手紙、即ちジェリー、リディア、タビサ等が語る多種多様の挿話の中から次第に克明に浮かび上って来る。旅の道すがらの出逢いに情をかける人、かけられる人、ブラムブルの旧友達の輪隔は、このそれぞれの語り手の多角度からの観察によって精密な肖像に仕上がって来るのである。数人を例に挙げよう。

先づブラムブルの素描はフイリップスに宛てたジェリーの最初の手紙の中で（四月二日、グロースター〈Gloucester〉より）気難かしい伯

父さんだとみえている。ブラムブル自身それに答えるようにルイス先生に宛てた手紙の中で甥と姪は心痛の種だ。何時迄も結婚しない妹のタビサと来たらまるで私の罪業が深い為に私を苦しめにやって来た悪魔の化身じゃないかと思う（四月十七日、クリフトン〈Clifton〉より）などと不平をもらす。ブラムブル自身は人間嫌いだと公言してはばからぬのだが……

Heark ye Lewis, my misanthropy increases every day. The longer I live, I find the folly and the fraud of mankind grow more and more intolerable.[15]

それは実は人一倍繊細で感動し易い心を隠すためだということを我々はジェリーの手紙（四月二十四日、ホットウェル〈Hot Well〉より）で知るのである。ブラムブルは人知れず、身寄のない貧しい母親と重い結核に罹っている子供に、こっそりお金を与えて援助の手を差し伸べようと計っていたのだ。これはタビサがむきになって批難する彼の欠点、即ち長所なのだ。タビサの不平たらたらの手紙がブラムブルの人の好さを極立たせて描き出す。

My brother is little better than noncompush. He would give away the shirt off his back, and the teeth out of his head; nay, as for that matter, he would have ruinated the family with his ridiculous charities, if it had not been for my four quarters. What between his willfullness and his waste, his trumps and his frenzy, I lead the life of an indented slave.[16]

この様にタビサの書き送る手紙から我々の受ける彼女自身の印象は、しっかり者の家政やりくり上手で、他人に厳しく、よくばりでけちな所のあるおばさんだ。だが、ジェリーは次のように言う。

In her person, she is tall, raw-boned, aukward, flat-chested, and stooping; her complexion is sallow and freckled; her eyes are not grey, but greenish, like those of a cat, and generally inflamed; her hair is of a sandy, or rather dusty hue; her forehead low; her nose long, sharp, and towards the extremity, always red in cool wearher; her lips skinny, her mouth extensive, her teeth straggling and loose, of various colours and conformation; and her long neck shrivelled into a thousand wrinkles. In her temper, she is proud, stiff, vain, imperious, prying, malicious, greedy, and uncharitable. In all likelihood, her natural austerity has been soured by disappointment in love; for her long celibacy is by no means owing to her disiike of matrimony: on the contrary she has left no stone unturned

to avoid the reproachful epithet of old maid.[17]

此のジエリーの描くタビサは少々彼女に気の毒なようだが、彼女の老嬢かたぎとでも言える様な滑稽な迄の突飛さ加減は旅の逸話の中に次々と現われて来る。けちで頑固な彼女はブラムブルが作男に与えた仔羊の皮を取り戻すと言い張って（五月十九日、バースにて、タビサよりルイス〈Dr. Lewis〉博士への手紙）お兄さんを困惑させるし（同じく五月十九日バースにて、ブラムブルよりディック〈Dick Lewis〉へ）ロンドンへの街道筋で雇い入れたクリンカーが食事の給仕に不馴れの失敗をやらかしてタビサの狆を粗末にすると、「お兄さんは私をとるかハンフリーをとるか」とブラムブルにつめ寄ったり、マルボロウ丘原〈Marlborough Downs〉で馬車が横転した時も自分の愛犬チャウダーのことだけが気にかかる利巳主義も良い所の性格を現わして来る（五月二十四日、ロンドンにて、ジエリーよりフィリップスへ）つまり前述のジエリーの戯画にふさわしい性格をだんだんと現わして来るのだ。ひたすら男性を掌中に捕えんものと腕によりをかけるタビサは四月にブラムブルトン屋敷〈Brambleton-hall〉を出発してこのかた七月半ば、エディンバラへ着く頃は既に七人の男性を試みていた、これにはおとなしいリディアも非難の口吻をとる。

My poor aunt, without any regard to her years and imperfections, has gone to market with her charms in every place where she thonght she had the least chance to dispose of her person, which, however, hangs still heavy on her hands, I am afraid she has used even religion as a decoy, though it has not answered her expectation.[18]

タビサは信心も婿殿獲得のための小道具にしている。然し、失敗してもめげずに網を張りめぐらすタビサは我々に苦笑いをさせてしまう人物である。うとましいけれど憎み切れる人間ではない。利巳主義ながら彼女は天真爛漫であるからだ。だから、スコットランドの中尉殿―インディアンの捕虜になって頭の皮をはがれた経験を持つ―をタビサが射止めた時はやれやれ御苦労様と我々もほっとして肩の荷をおろし、遂にはブラムブルの心境に首肯くようになる。ブラムブルはジエリーにしみじみと述懐していた。

This precious aunt of yours is become insensibly a part of my constitution. Damn her! She's a *noli me tangere* in my flesh, which I cannot bear to be touched or tampered with.[19]

さてそれではハンフリー・クリンカーはどの様な素描で作品に姿を現わすのであろう。マルボロウ丘原で一行の馬車が横倒しになった時、お

払い箱になった左馬騎手のかわりに雇われた彼はジェリーの言う所ではみすぼらしい田舎者、shabby country fellow で肌につけるシャツもなく御婦人方に裸の背中をみせた、わいせつな beggarly rascal（タビサ曰く）であるが、アラバスターの様に美しい背中をした（ウィニフレッド曰く）若者であった（ロンドンにて五月二十四、ジェリーよりフィリップスへ）。クリンカーはブラムブルの好意にすっかり感激して地の果て迄お伴致しますと言う。彼は愚直で大層メソジストに凝っている。ロンドンではセント・ジェームス前の広場で群衆を前に罪とその報いについて説教を始め、ブラムブルの頻蹙を買う程であるがタビサとウィニフレッドは彼の影響を受ける様になる。ウィニンフレッドはタビサの見よう見真似で熱っぽく信心に感化されてしまう。しかし、これもどうやら宗教熱の方はうわべだけである。（ロンドンにて、六月十一日ジェリーよりフィリップスへ）。ウィニフレッドが宗教よりもハンフリーに心を傾けてゆく様は彼女の文面がだんだんとクリンカーの口調らしいメソジスト風に染まってゆく所から察しがつくようにスモレットは仕組んでいる。（ロンドンにて、六月十四日、ウィニフレッドよりマリー・ジョンズへ）。

ハンフリーが偶然の機会からブラムブルの実子であると判明するあたり物語は余りに偶然をふりまわす常套手段が効き過ぎてお粗末にみえるけれ共、実子ならではの肉親の本能的愛情にブラムブルとハンフリーが知らずに惹かれている有様は馬車の転覆事件の際のハンフリーの働きとか、街道泥捧と間違われたクリンカーを親身になってブラムブルが救い出す話とかで伏線的暗示が与えられており、ああそうなのかと改めて我々を楽しませる。

ウィニフレッドがスコットランドの魔法使いお婆さんに占いをして貰ったら、クリンカーは相続人になると言った等と一ケ月も先に何気ない予告を出しているのもスモレットの神経の細かさではある（グラスゴーにて、九月七日、ウィンよりマリーへ）。彼女の綴りが凡そ滅茶苦茶で heir を hair と書いている所が面白い。

晴れてタビサの花婿殿になるリスマーゴの姿もジェリーとブラムブルの手紙の中でだんだんと克明に浮かび上って来る。彼はインディアンに捕えられてその土人を妻にしていた。彼女は人喰いにかけては種族の剛の者と争う、つわものであったそうだ。リスマーゴは論争好きである。本など殆んど読まぬと言い乍らエディンバラで使う英語の方がロンドンの英語より正当の英語であると「テムペスト」の一節の解釈を例証にとって見識を披露する（モーペスにて、七月十三日、ジェリーよりフィリップスへ。トウィードマスにて、七月十五日、マットよりルイス先生へ）。

そして終にはこの奇人がタビサと結婚したあかつきはさぞかし珍現象が続出するのではなかろうかと我々に楽しい想像をさせるのである。この様にあちらこちらの話し手の言葉から発場人物の肖像に筆を加えて念入りな仕上げをほどこしながらスモレットは物語をどんどんと大団円に導いてゆく。

四、笑　い

この作品にはいろいろの笑いがある。サッカレー〈Thackeray〉(1811—63) が立派に小説を書く技術が生まれて以来の最も愉快な物語……

The novel of "Humphry Clinker" is I do think, the most laughable story that has ever been written since the goodly art of novel-writing began.[20]

と言った如く、又ウォルター・スコット〈Sir Walter Scott〉(1771—1823) がスモーレット程消し難い哄笑の高らかな響きを誘い起したものはあるまい。[21] と言った如く彼の本領はげらげら笑う哄笑である。然しこの豪快な笑いの他にスモーレットはふくみ笑い、苦笑い、泣き笑いの様々を彼の手の内なる人物の配合によって作り出しす。彼は風刺を好む、それについての彼の見解はロデリック・ランダムの序文に窺える。

Of all kinds of satire, there is none so entertaining and universally improving, as that which is introduced, as it were, occasionally in the course of an interesting story which brings every incident home to life.[22]

そしてこの「ハンフリー・クリンカー」の中で彼の風刺は人物の配合の巧みさに依って豊かに次から次へとあふれ出て来るのだ。

ハリゲイトの温泉でブラムブルの一行が出逢った、スコットランド人弁護士ミックルウィメン氏〈Micklewhimmen〉(名前からして奇妙) は手足が不自由な様子で呻いたり哀れっぽくよそおったりで湯治客の御婦人方の専らの関心を集めていたが、足の枕を持って来て貰ったり、背中に当てるクッションをふわふわにして貰ったり御大層にしていたこの狸爺さんは、ある晩のこと火事が起ると、雄鹿の如きすばやさで人を押し飛ばし、蹴倒し、混乱の中をかけ逃げるのである。余りの狗変に我々は呆然とし、それから笑ってしまう。其の時迄、卒先して身の不自由な彼にかしずき、つき添っていたタビサは火事のどさくさに、猛然と逃走する彼の腕にすがり付こうとして彼に押し飛ばされた。彼女はたっぷり

皮肉を言う。

"Fire purifies gold and it tries friendship," cried Mrs. Tabitha bridling, "Yea, madam (replied Micklewhimmen); and it trieth discretion also," "If discretion consists in forsaking a friend in adversity, you are eminently possessed of that virtue," resumed our aunt. "Na, madam (rejoined the advocate), well I wot, I cannot claim any merit from the mode of my retreat. Ye'll please to observe, ladies, there are twa independent principles that actuate our nature, One is instinct, which we have in common with the brute creation, and the other is reason. Noo, in certain great emergencies, when the faculty of reaeon is suspended, instinct takes the lead, and when this predominates, having no affinity with reason, it pays no sort of regard to its connections; it only operates for the preservation of the individual, and that by the most expeditious and effctual means; therefore, begging your pardon, ladies, I'm no accountable in *foro conscientiae*, for what I did, while under the influence of this irresistible pooer"[23]

だがミックルウィメンのこのシャアシャアとした答えはどうだろう。読者はここでは苦笑いを禁じ得ない。ロンドン滞在の折ブラムブルが出逢った政治家、文人達の肖像からはスモーレットの悪ふざけの嘲笑が聞える。スモーレットの分身ブラムブルも亦大真面目でからかうのが好きである。余りに物知り振った為にブラムブルにからかわれるホットウエルの湯治場のL先生—臭気と汚物についての説に関して蘊蓄を傾ける—の姿は滑稽でもあり哀れである。(ホットウエルにて・四月十八日　ジェリーよりフィリップスへ)。バースでブラムブルが旧友と相擁した時の涙は眼玉をつつかれ、痛風の足指を踏まれた痛みと、老廃物となった旧友の現状をみる悲しみと再会の喜びとの入り混った、まさしく泣き笑いであったろう。(バースにて、五月五日　マットよりルイスに)。タビサはリスマーゴとの結婚の予告を発表しておき乍ら兄さんの友達の最近やもめになったベイナードをみつけると、ぶが良さ相なそっちの方へ働きかけようとする、この計算高さには怒るより矢張り笑いが先に立つ。(十月二十六日　マットよりデイックへ)。タビサと首尾よく結婚したリスマーゴが翌日、gallantry を発揮して溜息をついたり彼女の手に接吻したり秋波を送ったりし乍らお腹の中で笑っているらしいのには我々もつられてしまう。(十一月八日、ジェリーよりフィリップス・ナイト爵へ)。

ウィニフレッドは、クリンカーが追剥と間違われて拘留された時、彼の釈放に役立った人身保護法〈Habeas Corpus〉を怪物のような生き物だと思っている。執行吏の所に住みついていて五百才にもなろうかという奴が魔法の念力で鉄のボルトの二重錠をぱっと開け放ちクリンカーを

助け出したのだと彼女はマリーに話す（ロンドンにて、六月十四日　ウィンよりマリーへ）。タビサとウィニフレッドのやる "heterography" や "malapropism" も我々の笑いをくすぐる。"Lismahgo" をウィンフレッドは "Kismycago" 等というし、"…… I pray constantly for *grease*, (italics not in the original) that I may have a glimpse of the new light……" などと書く。（十月十四日　ウィンよりマリー・ジョーンズへ）。これは "grace" 神の恩寵を "grease" と取り違えるのだけれど "light" と grease" の連想は女中さんらしくって仲々効いているではないか。

タビサはぷんぷん腹を立ててルイス先生に送っている手紙の中で「私が同意するような理由を仰言って下さい」という所、"reason" を "raisins" と間違える。"……but rather give me some raisins (which hitherto you have not done) to subscribe myself"[24] そうすると、「貴方はまだ下さった事がないけれど、私の納得するように干し葡萄を少し下さいませ」といういみになってしまい、何でも取り込みたがる欲の皮の張った彼女の習性があて字に迄現われているようにみえ、我々はくすくす笑いを止めることが出来ない。

スモレットの笑いは屢々フィールディングと対照される。それは彼等の笑いがどちらも陰湿なものでなく元気のよい卒直な十八世紀の大笑いであるからなのだ。

結　び

さて我々は「ハンフリー・クリンカー」の語り手の配合のたくみさが旅行中の様々の事件や移り変わる景色を立体的に写し出しその中に活躍する人々の克明な肖像を浮かび上らせている事実を指適して来た。旅行記を彩る色調の基礎に春と冬の如き老年と若年を配し、これに絡む人物の綾なす感情の錯綜を織り込んでこの小説は厚みのある美事な絵巻物に出来上っているのである。然し考えるに、この人物の配合のバランスの良さは同時にこの小説の欠点となり得るのではなかろうか、人物の配合という道具立てに頼っている時の作品の限界は果して奈辺にあろうか、それを考えてみよう。小説に対するスモーレットの考え方は "Ferdinand Count Fathom" の献辞にうかがい得る。

A novel is a large diffused picture, comprehending the characters of life, disposed in differeut groups, and exhibited in various attitudes, for the purposes, of an uniform plan, and general occurance, to which every individual figure is subservient. But this plan cannot be executed with propriety, probability, or success, without a principal personage to attract the attention, unite the incidents,

unwinds the clue of the labyrinth, and at last close the scene, by virtue of his own importance.[25]

スモーレット自身ある状境を想定してその中で物語を展開し、主題を統一し、同時に登場人物の性格を極めてゆくといった具合の十九世紀的な小説の考えを持たぬから作品自体が立体的構成を持って発端から結末へ劇的な筋を展開し、それに従って登場人物の人間性を写し出すという事体は起らない。[26]

ブラムブル氏一行の旅の道中、現われる場面の一つ一つは人物の配合よろしきを得て立体的な生き生きとした描写となるが、それは次々と流れ過ぎて行く。そしてこの人物の配合はバランスがとれ過ぎていて各々が各役割にぴったりのタイプを演じその中から一歩も出ていないもの足りなさがある。つまり旅の進むにつれて我々は主人公役ブラムブル氏についても肖像の細部が塗り上げられてゆく様に性格を知って来る。然しそれは話の進むにつれて我々は克明に知る様になるだけであって彼の性格は一気難しくもあるが寛大で無礼や残酷な人間、巧言、偽善は容赦せぬが誠意のある者には限りなく愛情深いという特質—最初から最后迄同じなのである。ハンフリー・クリンカーにした所で波瀾万丈の生涯であるから性格的に発展があっても良い筈だが彼は終始ひたすらに信心深く忠実である様だ。又、この作品に於て人物の配合が良過ぎて偶然の配合が目立ち過ぎる欠陥になっていると思われる所も多い。勿論それは古来より物語の常套手段であるとしてもそれを手軽に乱用しすぎる様である。スモレットはピカレスク小説のル・サージュを愛読したという事だから旅の場面に次々と簡単に偶然の一致が登場するのはピカレスク風の影響であるのは確実だ。ル・サージュの「ジル・ブラス」では旅の道中何と奇抜なめぐり逢いが続出する。例へば、次々と主人を変えるジル・ブラスが或る日、トレドへ遊びに行く途中、追われる身のドン・アルフォンゾ〈don Alphonse〉という男爵の若い養子と刎頸のちぎりを結ぶ仲となる、アルフォンゾを追跡して来る者をさけて、ある山の麓の庵に身をひそめていると其処で二人をもてなし、アルフォンゾの身の上話を聞いてくれていた庵主が法衣をパッとぬいで身許を明らかにする。と、それはドン・ラファエル〈don Raphaël〉という、ジル・ブラスの昔の泥棒仲間であったり、その連れの法衣の僧はジル・ブラスの元の従僕アムブロアズ・ド・ラメラ[27]〈Ambroise de Lamela〉であったりというが如き奇抜な事件が日常茶飯事である。

ハンフリー・クリンカーの作中にもこの様な筋書きが起る、悪漢のファゾム伯爵が前非を悔いてグリーヴという名の村医者になっており、恩人のメルヴィル伯を助ける話とか（ハリゲイトにて、六月二十六日　マットより先生へ）、リディアの想い人、旅役者のウィルソンがブラムブ

ルの旧友デニソンの実子であったとか（十月十一日　マットよりルイス博士に）、クリーンカーの身許がある日突然判明する（十月四日　ジェリーよりフィリップスへ）等というのはつじつまが合い過ぎてどうも面白過ぎるのである。ル・サージュの悪漢ジル・ブラスは彼の波瀾の一生を泥棒をしたり、人を助けたり、宮廷に巾をきかす大立物のお気に入りになったり、御主人様の大司教に対して彼の説教について忌憚のない意見を述べて暇を取らされたり、人間がまるで良い加減なのであるがスモーレットのピカロ、ファゾム伯は心を入れ替えてからというものは全く曇りもない善人一点張りだから人物としては面白くない。

スモレットはそれぞれのタイプに属する登場人物像を作り上げてしまっている。クリンカーにしても彼は単純で愚直な信心の篤い人間のタイプであって、これはフォースター〈Forster〉のいう "flat" character であろう。然しこのクリンカーと、小間使いの典型的なタイプ、ウィニフレンドとを組み合せ、戦巧があるのにひきがない為出世出来なかった不運な熱血漢の中尉殿、腿が蝗の如きリスマーゴと、けちで自己中心、しかも天真爛漫にさえみえる45才のタビサの絶妙な組み合せを作り、老年の、気難かし屋で表面は社会に白眼を向けるけれ共浮世の辛苦を嘗め、内心は優しさに満ちているブラムブルと、常に公正で理性的な判断を下すようながらその実、血気盛んな若気の無分別の至りや甘さをちらつかせるジェリーとを配合し、終にはめでたしめでたしの王子と王女の物語の様に甘いウイルソンとリディアを組合わせる。これ等の人物の配合の巧みさは物語に偶然の続発する欠点や一人々々を取り出すと扁平人物になってしまう物足りなさを充分に補って余りある。それにスモレットはこの人物配合の妙味を駆使して十八世紀の英国の世相を、即ち海外ではスペイン、フランス勢を牽制し、国内では次第に勃興する新興階級が農業、産業改革を齎らす力強いエネルギーをみせている時代の都会、地方の生活、人々の知性、娯楽、悪戯、はては罵詈雑言迄を、彼の晩年の信条であったに違いない暖い人道主義的観察を以て豊かに描き出してくれる。此処にこの作品の得難い価値があると思われる。スモレットは「ハンフリー・クリンカー」の終の頁を閉じた読者の心にほの暖い余韻を何時迄も残すのである。ナップ教授〈L. M. Knapp〉のスモレット評はこの小論の最后を飾るのに適切な言葉であろう。

Smollett, with his own rare gifts, vitalized the pages of English fiction by eagle-eyed etchings of eighteenth-century scenes and manners, upon which social historians draw so heavily; by a masterful prose style; by incisive and socially significant satire; by perennially comic characters; and by the piquant flavor of his independent and dynamic personality.[28]

ドライデン〈Dryden〉(1631—1700) はチョーサーの「カンタベリー物語」を評して "here is God's plenty" と言ったが私はこの言葉を「クンフリー・クリンカー」にも分かち与えたいと思う。

〔註〕

① 宮下志朗「トマス・グレイ」英米文学史講座「十八世紀II」p. 1. quoting David Cecil : *Two Quiet Lives*, 1948, p. 78

② Samuel Richardson : *Pamela*, introduction by William M. Sale, Jr., 1958. p. v.

③ Tobias Smollett : *The Expedition of Humphry Clinker*, p. 35. Bath, April 23. letter from M. Bramble to Dr. Lewis. 頁数は "Everyman's Library" 版に従う

④ 円形広場〈Circus〉はジョン・ウッド〈John Wood〉が一七五四年頃着工しその息子がこれを完成した。スモレットが「クンフリー・クリンカー」を執筆上梓したのは一七七一年である。広場には Earl of Chatham や画家の Thomas Gainsborough やその他有名人の住居があった。

⑤ *Clinher*, *op. cit.*, p. 52. Bath, May 5. letter from Mat. Bramble to Lewis.

⑥ *Ibid.*, p. 46. Bath, April 30. letter from J. Melford to Sir Watkin Phillips of Jesus college, Oxon. この一節はドライデンの *Absalom and Achitophel* i. 544. のもじりである。オックスフォードの学生らしいユーモリーの教養がちらつく。

⑦ *Loc. Cit.*

⑧ *Ibid.*, pp. 46—47. Bath, April 30. letter from J. Melford to Knight, Phillips.

⑨ *Ibid.*, p. 38. Bath, April 26. letter from Lydia Melford to Miss Willis, at Gloucester.

⑩ *Ibid.*, p. 37. same letter from Lydia.

⑪ *Ibid.*, p. 83. London, May 29. letter from Matt. Bramble to Doctor. Old Blackfraiars Bridge は一七六〇年着工、一七六九年車の交通（馬車）のために開かれた、橋のアーチ形をどの様にするかで市民の間に大論争があった。

⑫ *Ibid.*, pp. 82—86. same letter from Bramble.

⑬ *Ibid.*, pp. 86—89. London, May 31. letter from Lydia to Miss Laetitia Willis.

⑭ *Ibid.*, pp. 103—104. London, June 3. letter from Win. Jenkins to Mrs. Mary Jones, at Brambleton-hall.

⑮ *Ibid.*, p. 45. Bath, April 28. letter from Matt. Bramble to Dick.

⑯ *Ibid.*, p. 42. Bath, April 26. letter from Tabitha to Mrs. Gwyllim, house-keeper at Brambleton-hall.

⑰ *Ibid.*, p. 58. Bath, May 6. letter from J. Melford to Phillips.

⑱ *Ibid.*, p. 247. Glasgow, Sept 7. letter from Lydia to Letty.

⑲ *Ibid.*, p. 59. Bath, May 6. same letter from Jery.

⑳ W. M. Thackeray : *English Humourists*, With introduction and notes S. Murakami 1951, p. 71.

㉑ Walter Scott : *Lives of the Novelists*, p. 71. World's Classics ed. in 村上至孝「笑ひの文学―スターンとスモレット―」昭和三〇年

㉒ Tobias Smollett : *The Adventures of Roderick Random*, 1902, p. xxiv.

㉓ *Clinker*, *op. cit.*, p. 168. Scarborough, July 1. letter from J. Melford to Sir W. Phillips Bart.

㉔ *Ibid.*, p. 75. Bath, May 19. letter from Tab. Bramble to Dr. Lewis.

㉕ Robert Giddings, *The Tradition of Smollett*, 1967, p. 64. quoting Tobias Smollett, *Ferdinand Count Fathom*, ed. by Saintsbury 1895.

㉖ 村上至孝「笑ひの文学」一八七頁参照

㉗ Lesage : *Histoire de Gil Blas de Santillane*, Tome 1, pp. 256—276. édition Garnier, 1962.

㉘ Lewis Mansfield Knapp : *Tobias Smollett*, 1963, p. 324.